空夢奇譚

ハラダさんは、住宅地はずれの、小さな家に住む老人男性である。
わたしがハラダさんと知り合ったのは、今から十年以上前、わたしが高校2年生の時のことだ。ハラダさんの服装や髪形から醸し出される独特な雰囲気と、その柔和な表情に惹かれた所為か、わたしはよくハラダさんの家に出入りしていた。ハラダさんの家は、家中に積み重ねられた古本の匂いと、布団に染み込んだ太陽の匂いに包まれており、その匂いが鼻に届く度、わたしは妙な安心感に包まれたものだ。一方ハラダさんは、わたしの顔を見て迷惑がることも喜ぶこともなく、わたしを室内に招き入れると、黙って和室に入った。ハラダさんはいつもその部屋で机に向い、ノートに万年筆を走らせていた。
和室には先ほど言ったように机と、それから年季の入った革張りのソファーがひとつ、置かれていた。壁には、わたしが生まれる以前のカレンダーがかかっており、部屋の残りのスペースは、拍子に熱い埃が積もった大量の本とノートで埋め尽くされていた。わたしは本を全く読まない人間だった為、それらのページを捲ることはなかったが、題名を見る限り、難しい植物の専門書であるようだった。また、表紙の端が崩れかけ、茶に変色していることから、かなり古い本であることが予想できた。ノートも本と同様の状態で、わたしはハラダさんの年齢が判断できなかった。と言うのも、ハラダさんの髪は黒々していたし、背も少しも曲がっていなかったから――つまりは、「老人」と言っても、精々50代にしか見えなかったからである。

さて、わたしはハラダさんと、殆どこの和室で過ごした。ソファーに座り、ハラダさんが机に向って何かを書いている様子をぼんやり眺めていることもあれば、学校や家での出来事を話すこともあった。そして本当に時々、ハラダさんが話をすることもあった。
吹く風も肌寒くなり、コスモスが満開を迎えた、丁度秋中頃のことである。その日、ハラダさんは珍しくノートを開いておらず、代わりに、真っ白で題名しか書かれていない装丁の本を開いていた。
「どんな本なんですか、ハラダさん」
わたしが訊ねると、ハラダさんは本から目をあげて、言った。
「植物について、書かれた本だよ」
「植物について、ですか」
「世界中の、野に生える草花や、人間の手で改良された観葉植物についてだ・・・・・・」
ハラダさんの話し方はいつもこのような調子だった。相手にではなくて、まるで自分に言い聞かせるかのように、夢見るような口調で話す。
「なんだか難しそうですね」
わたしがそう言うと、
「そのようなことはない」
ハラダさんは静かにその言葉を否定した。
「確かに専門的なことは書かれてはいるが、私は特にそのようなことを気にして読んではいないから」
そう言って後、ハラダさんはとあるページを1回で開いて渡す。もう、何度も何度もそこを開いた形跡があった。そこには大きな真っ白な花の写真が載せら

れており、
「月下美人」
わたしが呟くと、ハラダさんは突然、
「白い色素がないのを知っているかね」
そう訊ねた。わたしが戸惑っているのを気にせず、ハラダさんは言葉を続ける。
「白い花の色素の正体は、花弁の色素細胞下にある、海綿状細胞の気泡なのだが、これにあたって反射した光が白く見える、というカラクリなんだよ。そしてこの月下美人だが、」
わたしの手から本を取り上げると、写真を指さす。
「これは夜に咲き始めた朝には散るという、一夜限りの花でね。このまぶしいほどの白さを考えると、月下美人の色素の正体は月光なのかもしれないが」
そして浮かべたハラダさんの笑みはやさしく、しかし何処か寂しそうだった。ハラダさんはカレンダーに視線を向ける。それまで気付かなかったのだが、カレンダーにはひとつ赤いマーカーで印が付けられていて、それは紛れもなく何十年も前の、今日の日付であった。
わたしは見てはいけないようなものを見た気がして、視線を落とした。

その日、わたしは以前から気になっていたことをハラダさんに訊ねた。ハラダさんがいつも万年筆を走らせている、あのノートの内容についてである。
それについて訊くことは、わたしの中で多少の抵抗があった。そこに触れてしまうと、何かが壊れてしまう、そんな予感がしていたのだ。そこには何の根拠もなかったが。
わたしが訊ねると、ハラダさんは、緊張で少しこわばっているわたしの顔を静かに眺め、そして、
「『夢』を書いている」
「夢？」
「ああ。私はもうずっと前から、これを書き続けている」
「じゃあ、あの、周りにあるノートって皆・・・・・・」
「私が昔に書いたものだ」
ハラダさんは言った。と、そこでわたしはノートに厚い埃が積もっているのを思い出し、
「あの、読み返したりはしないんですか？」
夢を書いているのだから、夢日記なのだろうと思ったのだ。そして、日記というのは昔を懐かしんで、時々読み返すものという意識が、わたしの中では出来上がっていた。しかし、その何気ない質問を聞くと、ハラダさんの動いている手が止まった。そして、いつもの夢見るような口調とは打って変わった、今までにない強い口調で言う。
「読み返す、かね？」
ハラダさんのいつもと違う様子に動揺しつつ、わたしが首肯すると、
「そんなことは出来ない」
ハラダさんはわたしの返事など聞いていないかのように言った。そしてもう一度、
「そんなことは出来ない」
わたしは黙って、ハラダさんの声を聞いていた。
「全く君は変なことをいう。当たり前のことじゃあないかね？勿論それらの中で、はっきりと鮮明に覚えているものは沢山あるが、しかしそれは『読み返す』

ことが出来るものではない」
　冷たい風が何処からか吹き込んできて、室内の空気を冷やした。鳥肌が立つ。わたしは、ハラダさんの柔和な表情を、しかしいつもとは決定的に違う表情を眺めていた。能面のようであった。怖い。本能的にそう思った。暫く沈黙が続き（或いはわたしがそう感じただけかもしれないが）、わたしはどうにかしてこの空気を変えようと、口を開いた。
「空が、」
ごくりと唾を飲み込み、
「空が綺麗ですね」
我ながら馬鹿らしい発言だと思ったが、和室の窓から覗く風景に目を向け、半ば必死の思いで続ける。
「夕方の朱と蒼が入り混じった空の、昼とも夜ともつかない色が、わたしはとても好きなんです」
　これは嘘ではなかった。緊迫した状況で、嘘がつける筈がない。わたしは強張った笑みでハラダさんのほうを見る。と、ハラダさんは虚を衝かれたような表情をしていた。そしてゆっくりとカレンダーに目を向け、そして窓のほうを見た。ハラダさんは何の返事もしなかった。わたしが「もう帰ります」と腰を上げた時も、ハラダさんは窓の外を眺めていた。急にハラダさんが、百歳をとうに超えた、腰の曲がった白髪の老人に見えた。

　その日を境に、わたしはハラダさんの家に行かなくなった。3年生に進級し受験生となり、それどころではなくなったというのもあったからかもしれなかった。必死の勉強の甲斐あってわたしは志望大学に合格し、そしてその大学を卒業、郊外の小企業に就職した。
　そうして先日、久し振りの休暇で、わたしは高校時代の友人達と会う為に実家に帰った。かつての夢を叶えた友人もいたし、結婚して子供がいる友人もいた。わたしと同様、しがないＯＬの友人もいた。
　喫茶店で、懐かしさと気恥かしさの入り混じった思いで、学生時代のことを話していると、友人のひとりがふと、昔よく、変なお爺さんの家に入り浸ってなかった？とわたしに話を振ってきた。ああ、ハラダさん？とわたしが答えると、その友人は何でもないことのように、そのハラダさん、1年ぐらい前に亡くなったよ、と言った。学業に、仕事に追われ、ハラダさんのことなど思い出しもしなかったが、友人の言葉は信じられなかった。ハラダさんと死とは、わたしの中でイコールが繋がっていなかったのである。
　死因はなんだったの、と友人に訊いた。と、友人はあっさりと言った。
「大腸癌」

　あの日、ハラダさんの家の窓から見た空は確かに綺麗だった。今でも、瞼を閉じれば、鮮明に浮かび上がるほどに。しかし、変な考えだと思われるかもしれないが、わたしはハラダさんがあの時わたしと同じ空を見たのかどうか、分からないでいる。とてももどかしく、そして苦しい。目に見えるのに届かない、存在が分かっているのに取ることのできない「しこり」のようだ。
　唯一わたしに分かっていることと言えば、あの「月下美人」の話をしていた時のハラダさんの表情が生き生きして、それでいて何処か寂しそうに見えた、ということだけである。

あとがき

わけわからない話。それが俺クオリティ

読みかえすと、今と殆ど変っていない文章で、自分の未熟さに悲しくなりますが、それでもこの話は何となく好きです。